

第7回「震災遺構と展示が伝えるもの」

【話題提供】

高橋広子

石巻市震災伝承推進室。学芸員として2017年10月から石巻市震災遺構の整備に携わり、門脇小学校と大川小学校の展示を担当。震災からの学びを考える中で、自然との共生・生命・生きるとは何かを展示テーマとし、多様な視点で問いかけをもった展示を心がけてきた。自身の体験と様々な声を重ね合わせながら描いた「記憶を紡ぐ」の展示は、震災遺構のコンセプトにつながっている。被災当時は石巻文化センターに勤務し、考古分野の担当として博物館業務を担っていた。石巻市震災遺構 <https://www.city.ishinomaki.lg.jp/ruins/index.html>

【コメント】

江上ゆか（兵庫県立美術館学芸員）

筑波匡介（福島県立博物館学芸員）

林美帆（公害資料館ネットワーク事務局）

弓山達也（東京工業大学、宗教学）

【震災遺構と展示が伝えるもの__高橋広子】

◇震災遺構をつくってきた経緯

2017年10月から震災伝承推進室に学芸員の立場として配属になり、遺構整備と展示担当として業務を進めてきました。

石巻市には二つの震災遺構があります。R4（2022）年4月に一般公開した門脇小学校と、R3（2021）年7月に一般公開した大川小学校です。2018年から基本設計を進め、門脇小学校と大川小学校の二つを同時並行で基本設計、実施設計、展示施工を行ない、現在、両遺構とも一般公開しているという状況です。施工するにあたっての背景には、市民や住民、関わってきた方々の思いがあり、それを反映させながら、震災遺構という特殊な展示をどう整備していくのかは手探りの状態で、色々なことを見ながら、考えながら、工夫しながら進めてきました。

◇震災当時

石巻文化センター（当時の勤務地、博物館施設が入っていた）から、同僚と共に山に向けて避難を始めていた時、川からバケツの水をこぼしたような水が見えました。路地に入り進んだところで横から数メートルの水が横切り、近くの建物に逃げ込んでなんとか助かりました。自分自身が津波を体験したこと、助かったことが偶然であるということなど震災に対して色々考えることもあり、展示の整備に向き合ってきました。

◇石巻市の被災状況

石巻市の被災状況についてご説明します。石巻市は震源地から最も近い町になります。地形的な特徴としては、川が二つあり、その二つの河口から津波が押し寄せてきて、町を襲ったという当時の状況があります。二つの震災遺構もそれぞれの河口付近にあります。

石巻市の被害を見て行きたいと思います。最大震度は6強で、人的被害は3878人（R5年2月20日現在）、これは死者3188人と行方不明者414人、関連死276人を合わせた数です。こういった背景の元、震災遺構の整備を進めてきまし



た。

◇震災遺構を公開している目的と各遺構の紹介

石巻市としては、石巻市全体の被害状況をはじめ震災からの学びや教訓を伝える場として二つの震災遺構を整備しています。

① 震災遺構門脇小学校

南浜・門脇地区だけでなく石巻市全体の被害や学びを伝えることを担っており、遺構整備の目的としては大きく4つあります。これらを伝えるための施設として構成しました。

- ・災害から命を守るための避難行動
- ・平時における訓練の重要性
- ・地域を知ることの大切さ
- ・自然とともに育まれた命の尊さ

実際に展示を見ながら話していきたいと思います。

◇プロローグ

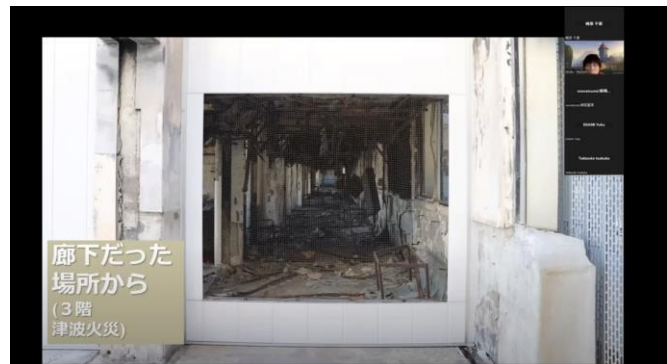
「わたしたちの記憶を紡ぐ 未来のいのちへつなぐ」と書かれています。これが施設のコンセプトです。最初に取り組んだ仕事として、プロポーザル方式により公募する際に、整備コンセプトが求められました。時間のない中で考えをまとめるのは大変でしたが、出来上がったコンセプトが展示に全て繋がっています。プロローグのメッセージは自分にとっても大事なものです。

展示テーマは、「自然との共生、生命、生きるとは何か」です。震災遺構は博物館や美術館のように資料を展示するといった形とは少し違う意味合いをもった場ですので、「～なのではないでしょうか。」というように、意見表明するのではなく、あくまでも問いかけの形を意識しながらメッセージや文章を書きました。

津波火災の痕跡を残す唯一の震災遺構と書いていますが、川と海からの津波だけでなく、火災が発生しました。火災の状況も津波の状況も残している震災遺構は門脇小学校だけだと言われています。避難の際は、垂直避難だけでは命を守ることが危うい場面もあるため、二次避難、三次避難が出来る場所を考えるようにしてくださいと、解説の際には伝えてあります。それが、ここが遺った意味であり、この震災遺構が物語っていることでもあります。

◇震災遺構（本校舎）

展示の工夫としてお伝えしたいところが、東側と北側の二ヶ所、校舎の中の様子が見えるように開けている点です。これは多角的な視点で、想像し考えてもらうことを意図しており、3階も同じように開口しています。遺構の次は、展示館の「記憶を紡ぐ」という展示になります。



◇展示館 3階 「記憶を紡ぐ」

展示館に入ると最初が「記憶を紡ぐ」という展示になります。ここが皆さんに特徴的だと言われる空間で、個人的にもチャレンジの空間として制作した場所です。美術館で作品を見るような雰囲気、震災からの学びを自分事として捉えてもらえるよう設えるよう心掛けた空間です。震災遺構を見てから入ってくるころなので、重々しいものが続いていくのは苦しいのですが、実際に体験をとおして感じたことであり、知ってもらいたいし、考えてもらいたいことだと思って書いています。なお、苦しさを少しでも和らげられたらという気持ちと、言葉の奥にあるものを想像するための助けとして、ここは言葉と絵で震災の体験を表現しています。体験談という形ではなく、そこから見えてきたものを私自身の言葉で綴っています。来た方に自分ごととして考えてもらうためにはどうしたらいいのかということ考えた展示です。



◇展示館 3階 「門脇小学校の思い出」

ここは唯一、震災前の展示をしている場所です。震災後だけでなく、やはり震災前の生活も大事で、ここは思い出話をしてもらえるような空間としてつくっています。震災＝後々の話だけではなく、思い出や風景も大切にしたいと考え、ここは笑顔で見てもらえるようにという形を意図しています。



◇展示館 3階 「門脇小学校の震災被害」

震災遺構って資料というのが中々なくて、解体した校舎の中のモノを資料として収集し展示しています。



◇展示館 2階 「石巻市の被害状況」

先ほどまで3階の展示で、2階は市全体の被災についての展示になります。写真と証言といった形で展示を構成しています。当時のラジオの音声を流していて、見る・聴く・触るという感覚を使って体感してもらえるよう工夫しています。映像展示もこだわって制作していて、被害というと、震災後の状況が思い浮かべられるのですが、震災前も震災後も魅力あふれる町なのだという事も来た方には持ち帰ってもらいたく、あえて各地区の美しい風景を織り交ぜながら制作し上映しています。



◇展示館 2階 「石巻平野と巨大津波」

石巻市で、何故こんなにも多くの犠牲が出てしまったのかを、科学的な視点で見ていく場所です。展示の中に津波の堆積物を示す地層の剥ぎ取り標本があります。そこには過去に石巻平野を襲った津波の痕跡が記録されているのであり、実は、東日本大震災クラスの津波が少なくとも3度、この地に押し寄せていることを示しています。想定外だったと言われる津波ですが、大地は記録していたのであって、過去の歴史に学ぶことの大切さや、日本は4つのプレートの上に乗っかっているので、地震は当たり前にかかるものなのだということ、自分が住んでいる場所や日本を俯瞰して考えを深めてほしいということを考えてつくっています。



◇展示館（屋内運動場）「応急仮設住宅」

最後に「応急仮設住宅」を展示しています。実際に中にも入れます。内壁などの主な素材は本物を移築して持ってきたリアルな展示になります。

展示テーマをもう一度振り返りますと、「自然との共生 生命 生きるとは何か」ということを考えながら作りました。「人間もまた自然の一部であるということ」を大事にしている展示であり、そこが他の伝承館との違いだとよく言われます。



◇展示館 2階 「心をほどく」

最後の展示は、「記憶を紡ぐ」と対になる展示としてつくりました。人間は自然の一部であるという考えや、普段から見ているものでも、時として、見ているつもりになっていたりはないだろうか、という問いかけの展示です。私自身も展示をつくっている中で考えさせられた場面がありました。展示の最後の空間なので、見てきたものを自分の中で整理すると同時に、自然と人

間や、生きるとは何かということにも目を向けてもらいたい、そうすることで、その人にとっての大切が見えてくるのではないかと願いを込め、つくった空間です。「記憶を紡ぐ」という空間と「心をほどく」という空間が展示の中で必要だということは、当初から私の中で決めていましたが、正直、最後までどう表現できるか悩んだ場所でした。偶然、校舎のこの空間に出会って、ここしかないと思った場所でもありました。

②石巻市震災遺構大川小学校

慰霊・追悼、防災教育、命について考える場所として整備し、現在公開しています。慰霊追悼の場という位置付けでもあるため献花台があります。門脇小学校も大川小学校も中に入ることができないので、外から見学いただく形になります。大川小学校では、校舎の周囲に、ここで伝えたいメッセージと解説を展示しています。

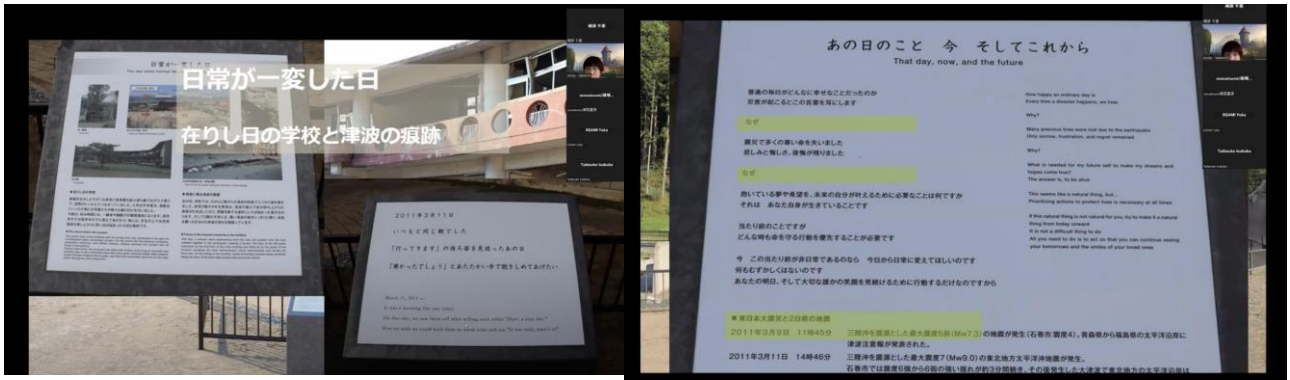
◇震災遺構（本校舎）

中庭にいくと、校舎の2階が3年生以上の教室になっていますが、下からだと見えにくいので、屋外の解説パネルで説明しています。大川小学校は児童さんや先生方が多く亡くなったところで、命について考えるべき場所でもあります。裁判もありましたし、色々なことを知りたい、考えたいという方が震災後から多く足を運んでいます。語り部の方がガイドをされていて、ガイドの方が話す内容と、ここで私が展示で書いているメッセージがリンクしたり、していなかったりするかもしれません。

ここで書いたメッセージというのが、「2011年3月11日 いつもと同じ朝でした 「行ってきます」の後ろ姿を見送ったあの日 「寒かったでしょう」とあたたかい手で抱きしめてあげたい」です。これを読まれた方がどういうことを想像されるのか、これを読んだときに誰を思い浮かべるのか立ち止まって考えてほしいと思い書いたメッセージです。この場所には色々な立場の方が訪れるし、住民の方も多く亡くなっているので、そういう背景も踏まえて、「行ってきます」「寒かったでしょう」という言葉は、色々な人を想定して書いている言葉です。

今回、展示ということで、言葉に向き合わなければなりません。言葉で表現することが多々あったんですね。色々な方にヒアリングをさせていただいて、自分の中で問い続けながら、考えてきました。大川の場合は、ご遺族の方や住民の方を交えた話し合いを何度も重ねていて、こういう風にしていきたいという私の問いかけに対して、皆さんの意見を伺って展示をつくっていて、大川小学校の展示に関しては一方通行というよりは、話し合いながらつくってきたところがあります。

外のメッセージに「あの日のこと 今 そしてこれから」があります。3行目と6行目に「なぜ」と書きましたが、これはこの続きを見た方に考えてほしいという思いからです。最後に「東日本大震災と2日前の地震」を書いています。事前防災ということが言われている場所ですから、あの日の事だけではなくて、何かが起こる前に、日常的に気づかなくてはいけないことが多々あるのだということを改めて考えてもらおうきっかけとして書いています。



◇大川震災伝承館（展示室）

伝承館には、門脇小学校と同じく施設のコンセプトである「わたしたちの記憶を紡ぐ 未来のいのちへつなぐ」のメッセージを書いています。これは、二つの遺構で伝えること、伝えていることは、根底では同じであるという意味を含んでいます。実物展示は2点と少ないのですが、大川小学校の被災後の校舎の中の写真や、裁判記録などが閲覧できます。様々な想いがあることを知ってもらおう展示もあります。

◇震災遺構から発信しているメッセージ

門脇小学校では「記憶を紡ぐ」の空間に、大川小学校では、敷地に入って最初の場所に、同じメッセージを展示しています。同じ言葉ですが、違う場所に違う形で展示しているので、捉え方も異なるのだろうと感じています。そこに書いてあるメッセージというのが、「自然が作りだしたこの世界で、未来をそうぞうし、生きることができるのが人間で、判断し行動できるのも人間、だけれども大事なことを見失い、気づけなくなるのも人間であって、それが実は怖いことなんだ。一番大切なものが見えなくなるのはなぜなのか。いのちの尊さや平和な日常を誰もが願っている…、話しあうこと、考えること、ともに確かめあうことで、きっと、あるべき未来はつづいていくのではないのでしょうか」と書きました。いずれも「～するはずです」という問いかけに於いて、見た方が考えられるように意図して書きました。



◇おわりに

最後に今取り組んでいることをご紹介します。震災遺構の展示にさまざまに反響をいただいでいて、図録を作ってくれないかというお話がありました。震災遺構で図録を作っているところはないのですが、解説書という形で作ることになりました。ある種解説書というのは図録とは別の意味を持っていると考えています。これまで作り上げてきたプロセスも踏まえて伝承という形で残すのはどうだろうと考えている最中です。

震災遺構は目に見えるカタチとして残っていること、その背景をイメージすることができるというのは良かったことだと思っています。モノとして展示できる部分もありつつ、経験を通して見えてきたことを展示で何かしらのカタチにすることの大切さを感じました。震災遺構を通して展示の可能性を色々と感じています。

展示を見て感じ考えることを通じて対話ができているんじゃないかと思っています。人による解説ガイドの情報ももちろん大切ですが、それによらない形での対話というものの重要性も感じているところです。それは、丁寧に思いを込めてつくることであり、例えば資料の裏側にいる人のことを感じられる展示なのかなと思っています。

色々な人の思いを形にする事の難しさもありますが、大切さも感じているところです。



【質問やコメント】

江上：正確さと心に訴える部分があり、震災遺構はそれだけで圧倒的だと思いますが、そこで終わらず、我が事として考えるバランスを非常にうまく取られていると思います。断定しない言葉を使うということだけでなく、そこから想像することのできる言葉であり、具体的である言葉が使われていると感じました。展示の空間も重層的で多角的であり、展示全体としてのバランスが空間として実現されていると思いました。その展示空間が実現されるまでの鍵になっているのが「紡ぐ」と「ほどく」というところで、当初から考えていたものの最後まで決まるのに時間がかかったというところをお聞きしたいです。また、2つの施設それぞれの違いについてのお話と、最後に来られた方のご意見やご感想についてお聞きしたいです。

高橋：「紡ぐ」の空間は、亡くなられた方も含めて記憶を繋いでいくことが未来の命が助かることをメッセージにしていました。ただ、亡くなった方の記憶も引き出していくべきなのではないかと思っていましたが、それは実現できかねた部分です。出来事としては災害ですが、根源にあるのは日常的にあること、普遍性のあることで、私たちはそのことに何かがあってから気づくんですよね。災害は身近に思えないことかもしれませんが、見えていないだけでそばにあたりするものなのではないか、それに気づくことで自分の人生に影響があるんじゃないかということを考えていました。震災＝被災者と捉えがちですが、現場で体験した人が被災者かという、私はテレビを通して見た方も被災者だと思って、そういう意味で限定しないということを当初から意識しながら作りました。震災と自分の体験を通して伝えることが、震災という部分が身近じゃない方に対しても自分事になるというところを工夫して作りました。自身が体験したこともあり、「紡ぐ」という部分は絶対に必要だと思って作りました。「ほどく」の部分に関しては知識を取り込んだまま帰ったのでは、ただの知識で終わってしまうので、それをもう一度自分の中で確かめることが必要だと思いました。「心をほどく」という空間は考える空間として作っていました。最終的には校舎の中に芽生えていたシダや苔などの生命の場所が一箇所だけあり、そこと出会った時に自分自身が向き合っていなかったことを痛感したんです。その空間からインスピレーションを受けて、その場所と出会えたから出来たことで、いつも解説の中では見ようとしないと見えないものがあってと解説したりしているんですけど、つもりになってしまっていることの多さという部分を空間の中で表現している感じです。

2つの施設の違いについては、個人的にはあえて違うものとしては作らないようにしてきました。同時進行でやってきて、大川小学校の方が公開時期が早いということがあり、並行してやっていた部分もあったので、場所として立った時には違うことを感じると思いますが、伝えることは一緒だと思って作っています。使う言葉を変えているところもありますが、あまり変えていません。

最後の質問の来館者の反応については、本当に作る時に様々な方に聞きながら、話してくださる方は辛いことも頑張ってくれて、ちゃんと受け止めない、という責任を感じて作ってきました。来場者の方は「生きることをちゃんと考えました」と言ってくくださる方が多くて、それを目指して作ってきた施設として有難いことだなと思っています。ちゃんと伝わるというのは嬉しいことでしたね。生きることを考えるということは多くの方が言ってくくださるかなと思います。

筑波：新潟県の中越地震のメモリアル施設を作ったのちに、福島県立博物館へ来ました。今現在は、ミュージアムエドゥケーターや防災教育コーディネーターという肩書きを大事にしながら活動をしています。私の活動目的は「自分たちの住む町に、愛着や誇りを持つこと」です。地域の課題を自分事化できる人材を育みたいとか、自分たちの住むまちを知ることによって愛着がわき、自分の住むまちを好きになるきっかけづくりをしたい。その時に、防災は、自分のまちを知るきっかけづくりに有効だと考えています。常々、博物館の資料は未来を創る資源であると思っていて、過去のものを残す倉庫ではなく、未来を創るための宝箱でありたいと考えています。例えば小学校4年生の子どもたちや先生と協働して、半年間かけて実験を行ないました。作品や展示物と対話できるようになったり、最終的には博物館を会津の人に知ってもらうのにはどうしたら良いのかという取り組みまで考えてくれるようになりました。美術館でよく行なわれている対話型鑑賞を参考に行なって見ましたが、小学生でも十分に行えるということが分かりました。

協働

何度か通ううちに博物館が好きになり、博物館に努めている人の課題意識を共有し

博物館のために何ができるか考え
博物館を地域の人たちにもっと知ってもらう取組を子どもたちが始める

対話的鑑賞から地域課題(博物館課題)の解決へ

「震災遺産を考える」「せなえの芽」「楽しいせなえ」
福島県立博物館 学芸課 主任学芸員 岡野分野/震災遺産保全チーム

ミュージアムエドゥケーター 防災教育コーディネーター 藤沢士
tsukuba.todasuke@fcs.ed.jp

福島県立博物館
Fukushima Museum

東日本大震災を伝えるための資料を我々は集めているのですが、それを活用していくためには対話が必要で、そのためには問いが必要なんです。会津若松は被災地から100キロ以上離れているので、ほぼ経験している人がいっしょにいないため、防災教育のため問いを使うこと、問いかけることで、キープアクティブ（能動的であること）であるためにも問いって大事なんじゃないかなと思っています。

主体的な学びとは

ラーニングピラミッド

講義	5%
読書	10%
視聴覚	20%
アクティブラーニング	30%
グループ討議	50%
自ら体験する	75%
ほかの人に教える	90%

数字は定着率

認知
学び
共有

より深い学びへ

学芸員が得意の講話は学習定着率5%

自己満足の話であるなら教育効果はほぼ無いという反省

アメリカ国立訓練研究所資料から作成

「震災遺産を考える」「せなえの芽」「楽しいせなえ」
福島県立博物館 学芸課 主任学芸員 岡野分野/震災遺産保全チーム

ミュージアムエドゥケーター 防災教育コーディネーター 藤沢士
tsukuba.todasuke@fcs.ed.jp

福島県立博物館
Fukushima Museum

問い

	問う側	問われる側	機能
質問	答えを知らない	答えを知っている	情報を引き出すトリガー
発問	答えを知っている	答えを知らない	考えさせるためのトリガー
問い	答えを知らない	答えを知らない	創造的対話を促すトリガー

安齋 勇樹 問いのデザイン

「震災遺産を考える」「せなえの芽」「楽しいせなえ」
福島県立博物館 学芸課 主任学芸員 安齋勇樹/震災遺産保全チーム

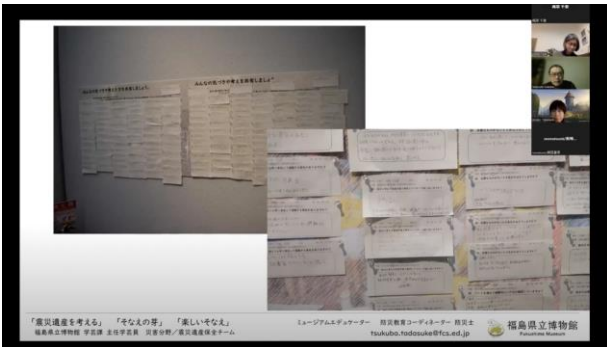
ミュージアムエドゥケーター 防災教育コーディネーター 藤沢士
tsukuba.todasuke@fcs.ed.jp

福島県立博物館
Fukushima Museum

原発事故の関係で、立ち入りが制限される時期が長くありました。そのため復興工事で資料が捨てられるということではなく、資料が多く残っている状況です。その資料を使って問いかけを行なっていけば良いのではないかと考えました。例えば、この資料は牛舎の柱なんです。牛たちだけがこの柱に繋がれたまま避難区域に残されて、食べるものがなくなった牛たちはこの柱を食べていましたがその後餓死してしまうんです。これらの事実を伝えていくために、「あなたは牛を逃しますか？」という問いかけなどを学校の先生たちと協力しながら考えました。「なぜ逃さなかったのか？」最後に、「牧場主にどう声をかけますか？」と、実際にこれを授業で小学校や中学校で行うと、子どもたちは真剣に自分事として考えるんです。資料と問いがあれば伝承は持続

可能性を獲得することが出来るんだという実践を繰り返しているところです。

展示室で皆さんからの意見をまとめていますが、能動的な状態で展示を見続けていてくれることが分かってきました。「震災遺産」と「問い」を合わせることで災害伝承の持続可能性と未災地での災害継承ということをやれたら良いなということを考えています。



私が元々いた中越地震の被災地では、展示施設を作るのにいろいろなトライアルを何回もやりました。市民の人が自分事の施設として考えてもらえるようにしました。それで出来たのが山古志の「おらたる」という施設です。ここでは震災のことを伝えたいというよりは、私たちが戻りたかった美しい街のことだったんです。この施設で行なったことは、蕎麦打ちや住んでいるおじいちゃんたちのためのパソコン教室だったりなど、地域振興的なことを多くやりました。震災伝承施設の目的は中山間地域の持続可能性の獲得でした。震災伝承が手段ということで、10年以

上経った今その施設がどうなっているかという、子どもたちの遊び場を作ったり、カフェを作ったり、それこそ私たちの場所なのだと思います。

市民活動センターとして作った施設も、子供たちが実際に触れることで災害の大きさが知れるようにヒビなどをそのままにしています。子供たちが書いてくれた感想を展示にすることで、またリピートしてくれたり、自分事が出来るような展示の工夫はいつも意識しています。目的は市民が主体となっていい地域を作ることです。



震災遺構は存置を私たちも残しました。この震災遺構が朽ち果ててしまった時に村が復興するんじゃないか？という長い時間をかけた動態展示になるんじゃないかと話をしていたんですが、震災から12年目に作り直されてしまったんですね。こうなってしまうと何のために残しているのか分かりづらくなってしまったと思います。

存置のその後が気になりました。存置という都合のいい言葉だけが東北に伝わったんじゃないか？というところで、風化していくものもあるだろうし、その後のことが気になります。残される時にその維持管理方法など、どういった話があったのかということをお聞きしたいです。本当に素晴らしい展示を拝見させていただいて、最後「ほどく」の部分がまさに破壊と再生の時間の表現のかなと思い、考えさせられました。



高橋：石巻市が言う存置保存とは、劣化していくのも含めて見守るとい考えだと思います。大川小学校特有かもしれませんが、そこでの存置の考え方は、震災で負った傷も含めてその状態を保持していくのが存置だという考え方があります。言葉に対して具体的に説明をしていないところが我々行政側の反省点でもあって、存置という言葉ひとつとっても言葉の意味が何であるかという議論はされてきていないということが出来るように思います。私が震災遺構の整備に関わることになったのが、存置保存ということが決まった後でした。引き継いだ時に存置の意味合いをど

う捉えていいのかと最初に思いました。大川小学校に関して言えば、搜索の際に重機が入っていることもあり、どちらかと言えば当時の状態のままではなく綺麗に整えてあるという震災遺構の存置です。門脇小学校の場合は手をつけない存置で、整備をする時にも中に入らないようにしているので、その時と変わらない状態で残っていると考えています。見る側としてはあの当時のまま、あれだけ残っているのが、深い学びになるのだろうと考えています。手を付ける存置ということが議論されていて、手をつけていく存置という考え方も出てくるんだろうなと思っています。問題点の指摘はしていますが、具体的にどうしていくのかということが行政の中ではまだ出来ておらず、課題として残っているという状況だと思います。

林：大川小学校の展示は、裁判があったことだったり、避難に関しての違いなどが際立っていて、裁判中に展示施設が公開になり、判決はその後という状況の中で非常に難しかったと思います。私も公害のことを扱っているので、対話の難しさを考えています。大川小学校のことに关しては社会の責任の問われ方という部分もあるので、こういう問題に対しては対話というものをどういう軸を持って、工夫されたのかということをお聞きしたいです。裁判の責任に対して展示でどのように再現されましたか？

高橋：対話という部分で、大川小学校の展示に関して、裁判が継続する中で展示をつくらなければなりません。その過程の中で色々な方にヒアリングをして作り上げていくべきなのですが、それが出来ないまま基本設計が終わってしまいました。実際に施工するというタイミングの後半で対話ができるようになって、解説も含めての中身というのを一旦私の方で書いた上で、対話の場を設けて話しを進めていった形です。こういう内容で進めていきたいんだというのを書いて皆さんにどうですかという話をしていきました。非常に濃い時間を重ねたこともあり、震災伝承推進室は行政ではあるけれど、（教育委員会とご遺族などとの間で）中立な立場でないと作れないとあって、どちらによることなく、伝えないといけないことの抽出をやりたかったんですね。裁判記録というのを基に、そこに載っている部分としては事実として記載はできるけど、いろんな思いがたくさんある場所なので、その思い自体を伝えないといけないと思っていました。一部の展示は固定せず、フレキシブルなスペースになるよう設計しています。裁判に関しての解説文も短いので、調べたい方は調べられるように伝承館のパソコンの中に入っています。両方の意見が見られるように整えてはいます。こちらの思いだけでは作れない部分もあって、丁寧な話し合いというのを継続していこうと思っています。

林：中立性という部分も難しいですね。責任主体がどこになるのかというところで、ラウンドテーブルや対話のテーブルみたいなものをミュージアムが持つ可能性があり、それを演出するのがミュージアムだと考えます。私もいわゆる公害という被害・加害の真っ只中にあるものに関わっているので、大川小学校が今後どうなっていくのかは注目していきたいと思っています。

高橋：大川震災伝承館の中に展示室は一つだけですが、関係者が自ら展示したいというお話はいただいていた。今回それを実現させた部分があります。行政とは別の展示という枠組みで、展示室の外にあるスペースの場所を貸すという形をとりました。展示をしたいという方々が主体

となりながら、それぞれの責任において展示をしていただいています。そこは自由度がある部分として、伝えたいという気持ちに蓋をするのではなく、行政の展示では伝えられないことを伝えられるような空間となっています。

弓山：命の教育や利他に関心を持って研究をしています。門脇小学校とのコンセプトと目的を見比べてみたのですが、目的には防災教育のことが書かれていて、コンセプトのところは命の教育に関わることが書かれているんだらうと思いました。どうやって減災、防災するのかという安全防災教育と命の教育の相性が悪いのかなということが気になって聞きたいなと思いました。

高橋：防災や減災と命の大切さがつながらないという部分で、避難訓練がなぜ必要なのかという問いが重要だと思っていて、なぜやるのかという、なぜの部分の共通認識であるとか、自分で考える部分があって初めて動けると思っています。今の防災教育でどれほど出来ているのか、当時の子供たちの証言を聞いているとそういうこともあるのかなと感じました。自ら考えるということがあって、はじめて防災教育に活きるのかなと思います。

村田：昔から伝わっている避難形態と、今の避難形態が大きく変わったものはありますか？

高橋：昭和の三陸津波の際に沿岸部に石碑を建ててあり、口伝えで津波のことを聞いてきているので、避難が早かったということがあります。私自身も海と川のすぐそばの施設で働いていたにも関わらず、それほど意識が高くなかったというのはあります。うまく答えの出ない難しい部分ではありますね。

東日本大震災の後にも、様々な災害があったと思うんですが、濁流のそばで写真を撮っている方をテレビ越しに見ると、私たちが何を伝え切れたんだらうということを考えてしまいます。遺構があるから伝承できているのかというところとそういう訳ではなくて、まだ足りていない部分もあるため、そういう部分を考えていかなければならないと思いました。

瀬尾：関東大震災の慰霊施設でもある横網町公園に、あの場所自体が火災旋風が起きて数万人の方が一気に亡くなってしまった場所なんですけど、その場所に慰霊施設を建てるべきかどうかという話を大正時代にもされていたという記録が残っているのですが、遺族の気持ちに触れるからあそこの場所に建てるべきではないという意見が多くて、建てない方がいいんじゃないかという話にもなったんですけど、そこに残さないと消えてしまうという危機感を持った人たちが、それが100年記憶を伝えて、その場所で弔うということが続いているということを知りました。東京は特に都市開発が激しくて、一回開発してしまうと何も見えなくなってしまうようなところに、100年前の人が踏ん張って作って残してくれたということが重要だということを改めて思って、門脇小学校もその場所にあるということが重要であると思いました。

また、東京の第五福竜丸の展示館では、第五福竜丸の記憶を残そうと50年前の署名運動を経て、船体自体を保存し、現在も展示されています。50年間の間に世代が変わっていく中で表現の仕方も更新されていて、その中で残っているということがとても重要だと感じました。今、門脇小学校は12年という時間で、見る人たちも震災当時を生きてきた人がいるという状況ですが、こ

れから先の 50 年という時間が流れる中で、必要な表現や地域の人たちがその場所をどう使いたいかということも変わっていくんだなと思いました。そこを長くどうやって地域の人たちや、同じ社会を生きている者たちが使っていくのか、どのような表現がどう時代に必要なのかということが重要なのだと思いました。今始まったということが重要で、一番パワーがいる仕事をされている高橋さんたちに感謝したいなと思いました。